

# この野菜高騰は 猛暑や洪水の影響か

例年であれば、7月下旬から8月にかけて、関東、東北産地の果菜類の最盛期と、最も底堅いとされる学校給食が休みになることが重なり、野菜単価は安く潤沢な出荷になる。ところが今年、大型野菜を中心に入荷が少なく、夏場には珍しく相場が高騰している。7月は記録的な猛暑と、相次ぐ豪雨や洪

水との因果関係がありそう。春からの野菜動向をみると、3月までの低温が4月には解消して相場も安値ぎみの推移。5月に入ると入荷量も大きく回復していたが、それも6月末までで、7月に入ると入荷減と徐々に相場高に向かった。8月上旬では過去5年平均単価との対比で1.23%と異例の高騰である。

## ダイコン

**単価は前年の1.5倍。柔軟性ない業務加工向け需要**

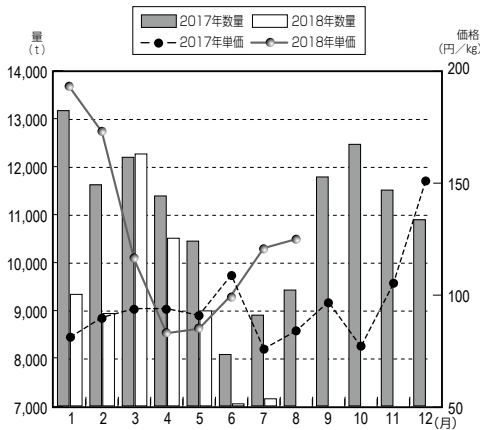
【概況】

東京市場におけるダイコンは8月上旬に単価125円と、前年8月平均単価の1.5倍に高騰した。野菜全体が3月までの低温推移が4月に春めき、5月には生育回復。6月下旬には近年にない入荷増となった。ダイコンの場合も、この時期6割以上の占有率を持つ青森産が前年同月比で8%増、続く3割弱を占める北海道産が17%増。そのため平均単価は前年より安くなった。遅れていた作柄が回復したためだが、それでも平年より1割高い。

【今後の対応】

夏場には、家庭での煮物野菜需要は少なく業務加工用需要が中心だ。今年の夏は7月から8月にかけてダイコン、ハクサイ、ニンジンなどが総じて高く、入荷の増減に敏感に反応するのは、小売店向けのよう需給関係に比較的柔軟な需要ではなく、まさに、なかつたら困る。業務加工仕向けが中心になるため。全国的に生産が減っても、東京市場だけでは荷物が集中する。そんなとき東京市場が高騰するのは、不足地域への転送需要が発生するからだ。

【背景】  
しかし、7月に入ると作柄の回復にブレキがかかる。今度は猛暑や干ばつ、その一方で場所によっては豪雨被害。野菜全体では前年比6%減の19%高のなか、ダイコンは2割減って61%も高くなった。青森産が15%減にとどまった一方、数量を増やしてトップになった北海道産は、被害多発で25%減である。ダイコンの入荷は、煮物主体の季節、秋から冬、春先までが多く、もともと一般需要は少なく業務用が中心の夏には、冬のピーク時より4割も少ない。



## ニンジン

**不需要期でも25%減で2倍の高騰。北海道産が支える**

【概況】

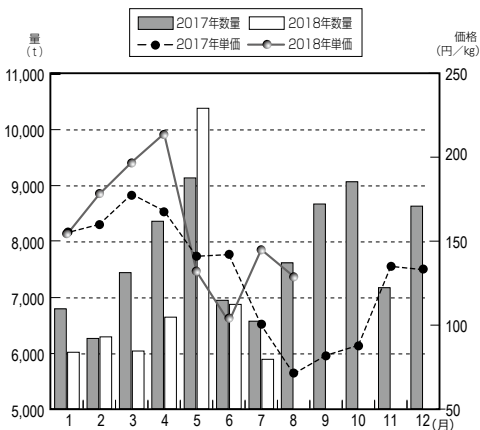
東京市場の8月上旬のニンジン入荷は25%も減ったためか、前年同月と比べ単価は約2倍に高騰。7月は入荷量は1割強の減、単価が45%高い。この時期の主産地青森からの入荷は3%減程度だが、北海道産が遅れており15%減、本来は残量があるはずの千葉産の切り上がり早く、前年より22%少ない。単価は千葉産が4%高程度だが、北海道産が44%、5割近いシェアとなった青森産は70%も高く、全体の単価を上げた。

【背景】

7月には主産地、青森産が高いのは(平均単価145円、青森産156円)分かるが、8月に入ってから単価が約2倍に。よほど高騰したかのようだが、129円である。例年なら青森の最盛期に、北海道産が本格化し始め、千葉産の残量がまだある、という潤沢な入荷に対して、学校給食が休みで煮物料理も減るなど、もともと需要も弱い時期。しかし7月には単価が45%も上がったためか、少ないながらも輸入品が前年比45%増、春の産地徳島からも2.9倍だ。

【今後の対応】

ニンジンは全体に需要増だ。加工用が中心だが、北海道産の大規模化傾向や、中国産の毎年10万t近い輸入が証明している。東京市場の全体の入荷量は10数年前と変化なく、北海道産はむしろ4割程度入荷が増えた。8~10月は9割前後の圧倒的シェアだ。これまでは、気候も安定して大型化と機械化も進んで、単価が100円を切っても収益を確保でき、需要側も安心感を持っていたが、独占的な産地化は今年のように自然災害が即リスクになる。



# 今年の市場相場を読む

入荷は安定していてもなぜか高値に。単価高でも需要

## キャベツ

【概況】

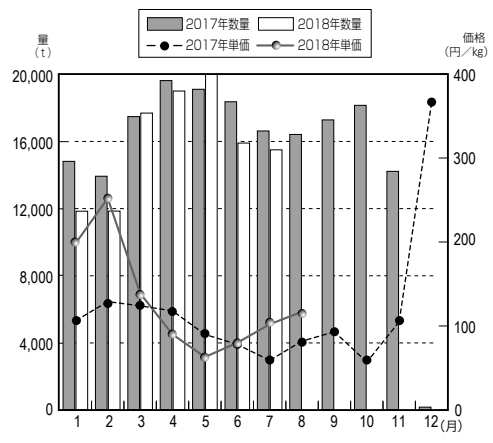
東京市場のキャベツは、7月に7%程度の入荷減となった一方で単価(102円)は73%も高くなった。8月に入り下旬には前年より4%くらいの入荷増となったものの、単価(117円)は2倍近く高い。この背景には、本来は6月に中心産地である千葉などの南関東産が日照不足などの影響を受け、6月下旬には千葉産が前年の36%減となり、急ぎよ群馬産が出荷前倒しで前年の2.4倍、長野産が1.9倍の入荷増でしのいだ。

【背景】

その結果、6月下旬には全体で2割近い入荷増となったが、単価(92円)は前年より1割程度高に。7月に入ると7割近い主産地の群馬は、2%程度の入荷減に収まったが、補完産地であるはずの岩手産の出荷が、日照不足と干ばつが重なって生育が遅れ、前年を22%下回る。7月の全体の入荷減は7%程度だったが、単価(102円)は前年より73%も高騰した。8月に入っても月上旬で4%増えながら単価(117円)は94%も高いという現象となった。

【今後の対応】

主産地の群馬は安定しており、入荷量も極端に少なくなはない。7月は確かに岩手が22%、茨城が38%、千葉が26%、北海道も24%とそれぞれ減であっても、72%のシェアを占める群馬産の入荷減は2%足らず。結論的には、この時期が需要期であるレタスや果菜類が、気象災害で軒並み減り、単価も平均2割前後高い。ピーマンは7割高だ。高くても家庭で使い勝手のいいキャベツに、需要が集中したか。この夏、煽悉キャベツのラジオ宣伝が多いのは偶然か？



## オクラ

【概況】

東京市場のオクラは本来、5月ごろから増え始めて7月にピークを迎え、8〜9月までの果菜類である。しかし、今年7月のオクラは前年同月より36%も少なく、単価は前年の96%ほど高い1291円。6月下旬には2%ほど減っていて7%くらいの単価高で済んでいた。高知の入荷減を鹿児島や沖縄が出荷を増やして補完したのだ。これが7月に入ると急変した。原因は、7月上旬から頻発した豪雨被害である。

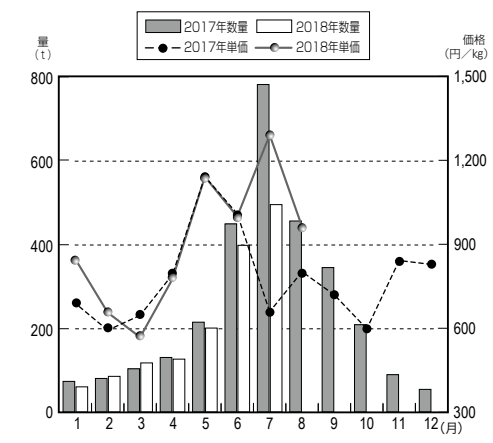
【背景】

大被害の中心は瀬戸内側に集中したが、オクラの産地がある南四国や九州地域にも、雨、風、日照不足などで大きな影響があった。生育の面でも物流関係においても障害が発生したのだ。いま、東京市場におけるオクラ産地は、鹿児島が32%でトップ、以下高知20%、沖縄13%に九州産地が続く。夏を中心にピークを作るが、秋以降、春まではフィリピン、タイ産が合計で20%を占める。東日本でも産地があったが、いまは群馬が4%を占めているだけだ。

7月ピークの産地に被害およぶ。東日本に補完産地を

【今後の対応】

オクラは夏場には、ネバネバ、食品として、継続的に人気が高く、東京市場への入荷量は過去10数年来ほとんど変わらない。平均単価は上がる傾向にあり、対応して九州地区では各県とも増勢傾向だ。輸入品は冬場を受け持っている、これも堅調に推移している。今夏はオクラのピークに対応する西の産地が気象災害を受けた。本来は関東から東北など夏の果菜類産地でも生産可能。夏場のピークに合わせ、東日本でも積極的な生産導入を期待したい。



流通ジャーナリスト  
**小林 彰一**  
 青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。